

生命の實相 第3卷

論理篇「上」

(138)

本當の教育についての講演

さらにキリスト教も「生長の家」によって生きることになるの
であります。キリスト教では、人は「神の子だ」といっています。
また「なんじの信仰なんじを癒せり」とか、「芥子種からしだねのごとき信
仰だにあればこの山にかしこに行きて海に入れといえ山も動き
て海に入る」とかいつているのでありますが、これはキリストが、
「三界がいゆいしんは唯心の所現である」という仏説を別の言葉にいいかえ
たのであります。心が肉体に現われて、人を病氣にもし、また、
病氣を癒しもする。子供の成績でも、商売上の栄枯盛衰えいこせいすいでも、
山の陥没かんぼつでも、噴火山の爆発でも、地震でも、皆、心の作用で
起こる。これがキリストの教えであります。そしてそれがただの
哲学的理論ではなく、そのままいくたの事実となつて「生長の家」
に現われているのであります。こういうように、キリストの教え
がそのまま実現するのでありますから、キリスト教の人によるこ
ばれるのは当然でありましょう。また日本固有の神道も「生長の
家」によって生きてくるのであります。侵略に利用された神道で
はありません。誰でも人間はすべて自身が「神の子」であること
を知り、すべての人間を神の子として拝む神道であります。昔は
日本人は誰でも何某なにがしのみことといっていました。そのみこと
とは「神の子」ということであります。すべての人を何々姫なにがしひめのみこと命、

何々彦なにがしひこ 命と呼び、すべての人を神として互いに尊敬しあつて
いた、これが日本人であります。彦、姫というのは、すべて「靈」
すなわち「靈的存在」の子であり娘であるという意味でありまし
て、男は靈子命、女は靈女命といつて互いに尊敬し、すべての人
を神の子として観る、それが古代からの「神ながらの道」だつた
のであります。かくのごとく、すべての宗教の共通の真理にさか
のぼつて、すべての人を仏子、すべての人を神の子と見る「生長
の家」では、仏教、キリスト教、神道の三教がそのまま少しも害そこな
われずに一つに生きていくことになるのであります。それ
で「生長の家」にはどんな人でも、どの宗教の人でも、喜んで集
まつて来られるのでありまして、各宗派の人々いずれも仲よく道
場で教えを聴いていられるのであります。

仏陀の聖訓

「まことに『怨み心うらみこころ』をもつてしては、その怨みを解くこと
はできない。ただ『怨みなき心』によつてのみ怨みを解くことが
できる。このことは永恒えいじうに易かわることのない真理である」とは
『法句經ほつくぎやう』の第五にある仏陀の聖言せいげんである。「怨み心」をもつて
しては怨みを解くことはできない、「怨み無き心」によつてのみ
怨みを解くことができるなどと実にきまりきつたことを、あたり
まえのことを、怒っている心は怒っているのだ、笑っている心は
笑っているのだというようなあたりまえのことを仏陀は何故いつ
たのであろうか。これは「迷まちっている妄心もうしん」で「迷い」を無く

しようと思つても、結局その迷いを解くことはできないものであるという真理を説かれたものである。怨みを解くには、怨んでゐる心でその怨みを解消しようと思つても駄目なのである。「本来怨んでゐない心」を出して来た時、怨みはひとりでに解けてしまつてゐるのである。「暗の心」で「暗の心」を消そうと思つても駄目である。「光の心」を出して来さえしたら暗の心は自然に消える。そのほかの心をもつてしては「暗の心」はとうてい消えないのである。「暗の心」は「無い」と知つたら「恨み心」は本来無いと知つたら、もう暗の心は消えており、恨み心は消えてゐるのである。

第一章 永遠価値の生活序説

「永遠価値の生活」の探求

われわれ人間の魂を湧き立たすあらゆる問題のうちで、最も重要な問題はなんであるかといえ、人生の目的如何？ ということとであります。むろんそんなことを頓着しない人間はたくさんあります。そういう人間はただ五官の世界にだけ住んでゐるのであります。人間とは肉体であり、肉体を楽しませしめることができれば、それで善いものだと思つてゐるのであります。そして、地上の生活時期が終わつて肉体がまさに彼からもぎとられようとするときになつてから、初めて「なんのための自分の人生であつたのか、自分の人生に、永遠的価値ある何物かがはたして残されてゐたであらうか」と振り返つて長大息するのではありません。

肉体という形あるものが消えようとするとき、形なきそして永遠に価値ある何物かの存続を求めるのは人情であります、しかし今まで彼は形の世界——五官の世界に歎びばかりを求めていたのでありますから、彼の人生には「形を超越せるところの永遠に存続する価値」などは一つも創造されてゐない。そして創造されてゐないものは存在しない。彼の前途にはただ暗澹たる空虚あるのみであります。諸君よ、われわれはこんな空虚な人生を生活したくないのであります。

人生の目的とは、要するにこの世に神の生命を顕現することです。神がこの世にあらわされた生活を示現することです。音楽は音楽家の永遠の生命が、五官に触れる形式にあらわされたのであるがごとく、人生は神の永遠の生命が、五官に触れる形式にあらわされたものでなければならぬのです。完全なる意味においては、人間とはひつきよう「神人」でなければならぬし、人生とはひつきよう「神生」、でなければならぬのであります。

「神」なる「永遠の価値者」と諧和した生活であつてこそ、その人の人生が永遠価値あるものとなるのであります。「生長の家倫理学」とは要するに、「人生に永遠価値を生きる生活の指導学」ということになるのであります。それは神の生命がこの世に顕現する道の指導学、神なる「永遠の価値者」を正しく人生に投影する生活はいかにすべきかの指導精神の解明となるのであります。

第五章 実相を隠蔽する傲慢と自卑

第一の神性隠蔽（罪）としては「神我一体」の実相を包んで見ざるごと、第二の神性隠蔽としては「自他一体」の実相を隠して見ざるごと、第三の隠蔽としては「隠蔽の隠蔽」として自己弁解すること、第四の隠蔽としては外界がただ自心の展開なる事実を観ず悟らず、外界をもつて自分に対立するところの有限の世界として観じ、自心の整理を先にせず、物に執し物を奪い合はんがために、兄弟と相争い——ここにこれら四つの根本的神性隠蔽が相寄り相混じて、種々なる罪を構成するにいたるのであることは、前節までにおいて詳細説聯せるところであります。

「物あり」と思うがゆえに、物に執着し迷うのであります。「物」が自心の展開であるということが判れば、自心を整えるよりほかに物を得る道はないので執着が破れてしまうのであります。「自他一体」の事実が悟れないゆえに、利己主義が生じ、利己主義が、「物あり」という迷いと混合して、貪欲、怒り、憎み、嫉妬、虚栄などの諸罪を構成するのであります。

われわれが自他一体だと申しますのは現象界の人間のことでありません。ごらんのとおり現象界の人間は個々別々に分れている。これは誰でも知っている。わたしが御飯を食べても他の人のお腹が膨れるわけではない。わたしが旅行しても他の人が旅行先で楽しめるわけではない。わたしが金殿玉楼に住まってもルンペンが救かるわけではない。こういうふうには現象人間は個々別

々離れ離れであつて、A者の快感はB者の快感に共通するものではない。またB者の苦痛はA者に共通するものではない。だからA者はB者の苦痛を犠牲にして、ただ自分のみの快楽を貪ろうとするのが利己的快楽主義であります。しかしそれは現象人間が個々別々である事実の上からは、それは当然すぎるほど当然なことであつて、それは罪惡だということとはできないのであります。だから肉体我を唯一の「我」であると思ひ、あるいは肉体我を本来實在であると思ひ、利己的快楽主義はなんら非難されるべきではない。しかるに利己的快楽主義が道德上非難されるのはなぜであらうか。道德上すなわち「天地にミチる無上命令の法則」の上から、利己的快楽主義が非難されるのは、天地にミチる生命の実相が、本来自他一体である事実にながら背反するからであります。キリストが「生命を得んとするものはかえつてこれを失ひ、およそわがために生命を梢つるものはかえつて生命を得ん」（『マタイ伝』第十六章二十五）といったのは、前者の生命とは肉体我現象我の生命、涓てかえつて得る生命とは実相我の生命なのであります。キリストは実相我（久遠の我）の顕現として「実相のために、生命を梢つるものはかえつて生命を得ん」といわれたのであつて、仮相の「肉体我」の生命は本来無いものだから、それを実相我のためにすてて、実相我を活かすようにすれば本当の生命を得ることができるといったのであります。

第六章 価値の本質

価値要求は人間の実相にある

ところで、価値すなわち値打というものを知るのは、われわれの心の中にある判断力によるのでありまして、判断力がなければ価値があっても価値があることがわかりません。誰かが善いことをすると、われわれは心の中でそれは値打のある行為であると認める、この判断力を哲学上の言葉では悟性と申しております。この悟性によってわれわれが人の行為の善悪価値を判断するのは、金銭上の値打などというような相対的関係の値打でなしに、ものそのもの——人間そのものに内在するところの、本当にあるものが出ているので、貨幣の値打などは別に「あの人の行為は値打がある」というのであります。

まことに「価値」というものはこの人間の内部に宿っておりまして、それがどうしても内部から押し出し表現しなければならないうというような一種の迫力をもって、われわれに圧倒的に内部から強制的に現われてこようとしているのであります。これは絶対的存在の価値が表現されようという力ですから、相対的の価値、すなわち物質や金銭上の損得のことなどで抑えることはできません。損になっても、物質的肉体は死んでさえもこれは善事であるからなさればならぬと、人間の内部にあるところの「値打」は五官の目には見えないけれども、本当にあるものなのですから、非常な圧力をもって厭でも応でもそれをなさしめようとする。憐れな人に出遇えば、「彼は憐れなるものであるから救って上げ

たい」というような熱願熱情となつて、内部から厭でも応でも人間を押しつけてそれを実行させようとするのであります。そしてそれを本当に実行できた時に、物質は滅びても、肉体は滅びても、自分は生きた、生き甲斐があった、値打のある行ないをしたという感じがしてくるのであります。

この善をなせ、値打のある行ないをなせという要求が、内部から非常な圧力をもって迫ってきて、それを実行した時に肉体は死んでもよいというほどな大きな喜びの感じが起こってくる——この喜びの念、生き甲斐の感じは「値打」の感じすなわち価値感でありまして、内部にある価値の標準があつて、その標準に合ったものを賞讃する感じであります。この標準を規範といい、目的とあるのであります。この標準、規範、目的はすべての人に普遍的に存在しているので、たいていの人は一つの行為に対して善とか悪とかいう判断に対して一致してくるので、その普遍性が証明されるのであります。

無論、相対的な善とか悪とかの判断は時代によって変化してまいります。大石内蔵之助が、吉良上野之介を討つて主君の怨みを晴らしたというようなことは、その時代には「善」でありましたけれども、現代ではそのようなことは「善」だとは考えられません。そうすると、「善」というのは普遍的なものではなくて、時代によって変化するところの相対的な価値であるとお考えになるかもしれません。無論、相対的価値からいうと、「善」とは人時処の三相応にかなうものを「善」というのでありますから、無論

時代時代によって変化してまいります。しかし、人類の福祉のためには己を空しゅうして仕えるというような絶対的なことが値打ある行ないだということは、これは普遍的の価値標準であって時代の変化によって相対的に変わるものではありません。

生命の實相 谷口雅春 日本教分社